

Computer Report

Vol. 51 No. 3 3月号 (通巻 678 号)

はじめの言葉

■中東／アフリカ大陸における政権崩壊のドミノ現象は、トドまるところを知らない。次々と長期に渡る強権力者たちを国外に追放している。そのニュースは、ただちに世界中を駆け巡り、さらに新たな近辺の権力者追放運動へと飛び火していつている。追放された、あるいは追放されようとしている強権力者達の特徴は、長年最高権力の座にいた者ばかりである。改めて強いリーダーシップとは何だと思う。

■今、ドミノ状態で崩壊していつている強権国家の共通点は、長きに渡って情報の独占をしてきた国だということだ。国民の知る権利、言論の自由、表現の自由、思想の自由を極度に制限していることである。奇しくも、反権力／反政府の国民行動の源となったのは情報であり、支援したツールはインターネットメディアだった。強権国家が独占してきた情報を国民が国民の側に取り戻した瞬間でもあった。

■これこそ、情報爆発である。長年圧政に苦しめられてきた国民の怒りの火が情報爆発を通じて現れた。そして国民による革命パワーとして結実しようとしている。国民ひとり一人の力は小さくとも、同じ時刻、同じ場所に参集することが蜂起となった。想像もつかぬほど巨大な力となった。流された情報は些細なものだった。一緒に集結する時間を申し合わせただけである。その些細な情報が大きな革命を産んだ。

■当該諸国の旧勢力も、最後まで権力維持に動き、インターネット上の情報操作を繰り返して試みたようだ。しかし徒労だった。権力者による情報独占／操作の終焉だった。インターネットメディアを通じて、一旦、民衆の側で流れ始めた情報の流れを止めることはできなかった。そして、長年の強権力者達は権力の座から追放されていった。1年も政権維持ができないで消えていく日本の政府とは一体何だろうと思わされる。

■崩壊しつつある強権政権の有り様は、まさに戦時体制そのものであり、第二次大戦中の「欲しがりません、勝つまでは」の非常時状態の日本を彷彿させる。これを、強いリーダーシップのある国だということか。今の日本国民のほとんどが「ノー」だろう。現在の不甲斐ない日本政権、敢えて、開かれた情報社会としての日本、そこにおける真の指導者を模索している日本、その産みの苦しみの過程にある日本だと考えたい。

■実に実態が伝わってこない世論調査を連発する既存のマスメディアだが、どうしても現在の世論を投影しているとは思えない。強権独裁政権が情報統制の道具としてきた既存メディアだからだろうか。政権による統制不可能なインターネットメディアにシフトした時、果たしてどういう世論が浮かび上がってくるか。若い世代が信頼し、大多数が活用し始めた新世代メディアの動向に期待したい。

■地震大国日本から、語学研修に出掛けた前途ある若者達が、南半球の日本と同じ島国ニュージーランドで発生したマグニチュード 6.3 の大地震に襲われた。瓦礫の下から日本の肉親に助けを求める電話が入り、それが地元警察に伝わり救助につながったという。情報力の素晴らしさを改めて痛感した。同時に、ほぼリアルタイムで入る同地の被害状況、犠牲者の多さに心が痛む。前途ある多数の犠牲者に心よりご冥福をお祈りしたい。(藤見)